

金を残して死ぬ者は下、事業を残して死ぬ者は中、人を残して死ぬ者は上

後藤新平 ごとう しんぺい (1857-1929)

後藤新平(ごとうしんぺい)(安政4年~昭和4年)は、内務大臣、外務大臣、東京市長等を歴任し行革と都市政策の先駆者としての功績で名を残している。

ある時、後藤は「金を残して死ぬのは下だ。事業を残して死ぬのは中だ。人を残して死ぬのが上だ」と語った。この言葉通り後藤は多くの実業家を後世に残した。

後藤の関与を受けた実業家を上げればきりが無いが、西武王国を築くルーツとなる軽井沢の沓掛(くつかけ)地区の開発を「今は経営者にしても気宇広大な奴がおらん。この軽井沢あたりも君のような若い者が50年ぐらいの計画で開発したらいい」と、堤康次郎(つつみやすじろう)(西武グループ創業者)に勧めたのは後藤であった。堤がまだ30歳にも満たない時である。

読売新聞の再建を頼まれた正力松太郎(しょうりきまつたろう)を支援したのも後藤であった。正力に「10万円(今なら数億円)貸してほしい」とお願いされた後藤は「新聞経営は難しいと聞いている。失敗しても未練を残すなよ。金は返す必要はない」と言い10万円をポンと貸したという。当時、正力は政治家のことだから、どこかから都合したのだろうと思った。しかし、後藤の死後、実は後藤が自宅を抵当に入れ、無理して借金をした金であることを遺族から聞かされて知ることになり、正力は号泣したという。

後藤は元々医者であったことから医薬産業に携わる実業家も育てた。星一(はじめ)が星製薬株式会社を設立するのを支援し、漢方薬の津村順天堂(現ツムラ)の創業者、津村重舎(つむらじゅうしゃ)を可愛がった。

また神戸のベンチャー企業、鈴木商店の番頭、金子直吉(かねこなおきち)の支援もした。後藤が台湾総督府民政長官の時、台湾の樟脳油65%の販売権を与え、鈴木商店大飛躍のきっかけをつくった。鈴木商店は三井、三菱と肩を並べるほどの大商社に発展する。

しかし鈴木商店は昭和2年の金融恐慌の煽りを受けて倒産してしまう。だが鈴木商店が関係した会社は今も健在しているものが多く、神戸製鋼所、帝人、日商岩井(現双日)、豊年製油(現J-オイルミルズ)、石川島播磨(現IHI)、クロード式窒素工業(現三井化学)、帝国麦酒(現サッポロビール)等、全て金子が種を蒔いた事業である。

そして金子はまさに後藤の言葉通り「人を残して死んだ」実業家であった。金子の薫陶を受けた人は、高畑誠一(旧日商岩井の創業者)、大屋普三(帝人社長、吉田茂内閣の商工大臣、運輸大臣歴任)、杉山金太郎(豊年製油【現J-オイルミルズ】社長)、田宮嘉右衛門(神戸製鋼所の実質的創業者)、北村徳太郎(播磨造船所【現IHI】支配人、芦田均内閣の運輸大臣、大蔵大臣歴任)等、実に多くの人を育てた。

後藤が育てた人からまた人が育ち、今日に至るまで経済や雇用や税金の面で貢献する会社が数多く残った。